

# 日本銀行の資金供給と補完当座預金制度の導入

— 金融市場における資金供給の円滑化を促す新たな措置 —

## はじめに

アメリカの大手投資銀行リーマン・ブラザーズが破綻した2008年9月以降、日本銀行（以下、日銀）は、金融機関が資金のやり取りをする場である短期金融市場へ大量の資金供給を続けています。また、日銀は市場に大量の資金を供給しても金利が下がりすぎないように、同年11月16日から、「補完当座預金制度」の運用をはじめました。そこで、今回は日銀が行なう資金供給、補完当座預金制度と補完貸付制度について解説をしました。

## 1. 日銀の資金供給

日銀の重要な役割として、信用不安などで金融市場の資金供給が逼迫している状況では、資金調達が厳しい金融機関に対して積極的な資金供給を行い、金融危機を未然に防ぎあるいは拡大を防ぐことが求められています。

その反対に、資金が余剰となって金融市場の金利が極端に低くなっている状況では、日銀は、機動的に資金吸収を行って、市場機能（需給の状況や取引当事者の信用度を反映した金利形成が行われるという意味での機能）の低下を防ぐことが求められています。

## 2. 補完当座預金制度導入の背景

リーマン・ブラザーズの破綻を契機に、欧米のみならず日本の短期金融市場でも緊張が一気に高まりました。図1のとおり、日中の短期金融市場の金利（コールレート）の最高値と最安値との金利差が急拡大しており、金利の振幅が大きくなりました。最高値の上昇

の背景には金融危機の影響を受けて、信用が比較的低い金融機関にとって資金調達がしにくくなった一方、最安値の低下の背景には、資金供給側の金融機関にとってより安全な運用先が少なくなったほか、日銀による大量の資金供給が行われたこともあって資金余剰が生じたとみられています。

そのため、日銀には、大量の資金供給が求められたのと同時に、資金吸収を行うという全く正反対の金融市場の調節が求められました。そこで、日銀は補完当座預金制度を導入することにより、短期金融市場の金利低下（ゼロ金利）を回避しつつ、「最後の貸し手」として積極的に資金を供給できるようにしました。

## 3. 補完当座預金制度

金融機関が日銀に預けている当座預金はこれまで無利子でしたが、「補完当座預金制度」は、当座預金のうち、法律で預け入れが義務づけられた額を超えて預けた分に年0.1%の利息をつけるものです。2008年11月の準備預金積期（11/16～12/15）から2009年9月の同積期（9/16～10/15）までの臨時措置です。短期金融市場の金利がこの制度の利率より低いと、金融機関が市場で資金を運用するよりも、日銀の当座預金で運用した方が有利になるため、この適用利率が事実上市場金利の下限となります。

## 4. 補完貸付制度

一方、短期金利の上限となるのが、金融機関が日銀に差し入れている担保の範囲内で、希望するときに資金を日銀から借り入れでき

る「補完貸付制度（ロンバート型貸出制度）」の金利です。この制度は2001年3月から実施されており、現行の金利（ロンバート金利）は年0.3%です。短期金融市場の金利がこの制度の利率より高いと、金融機関は市場から資金を調達するよりも日銀から直接調達する

方が有利になることから、その利率が事実上市場金利の上限となります。補完当座預金制度と補完貸付制度の両制度によって、市場金利の上限と下限が実質的に設けられ、短期金融市場の金利は図2のように0.1%~0.3%の範囲で動くことが期待されています。

図1. 短期金融市場の金利（コールレート）の推移

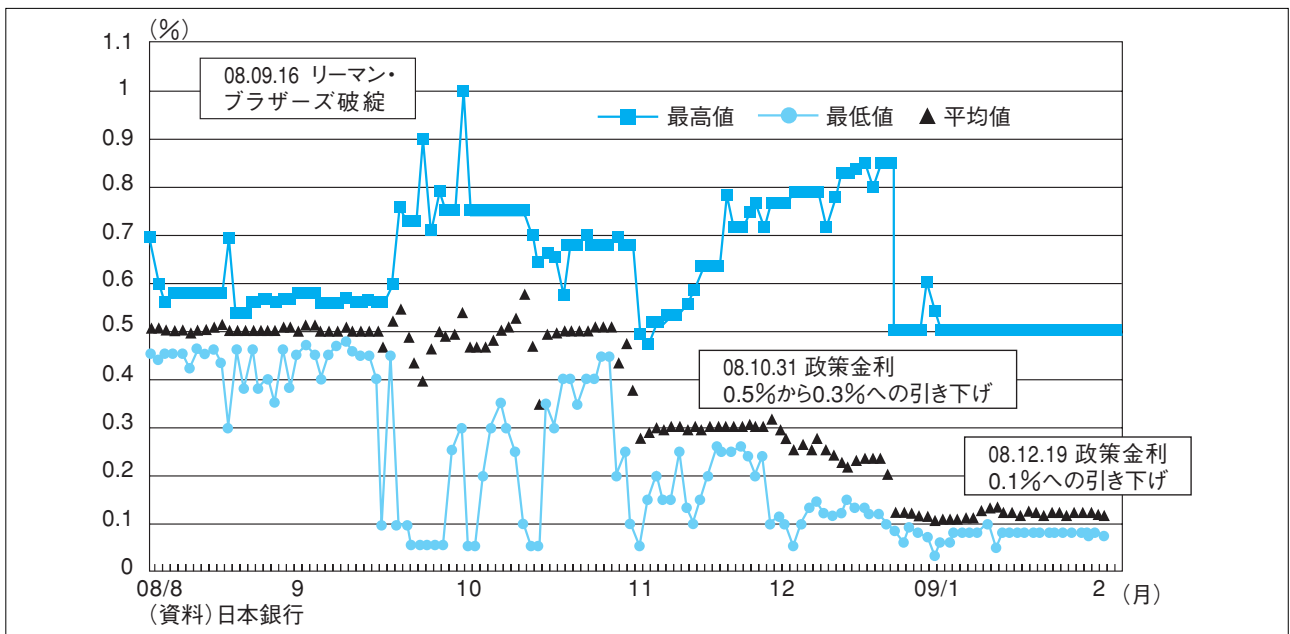


図2. 補完当座預金制度と補完貸付制度による金利変動のイメージ

